

ズシンと、底から突き上げられるような衝撃だった。揺れが収まるまで数秒。ベッドの上でなすがままだった。九月六日未明の胆振地方を震源とした最大震度七の地震と、それに伴う北海道全域の停電。私たちの生活のもろさを思い知らされた。

当日未明、札幌市中心部の会社へ向かうため、携帯電話の明かりを頼りに着替えた。タクシートの電話がつかまらない。とりあえず、自宅を出た。真つ暗な闇に突然放り出されたように、恐る恐る道を進んだ。

運良く、タクシーを捕まえ、途中、札幌・ススキノを通った。ネオンと信号が消え、道路を人と車が行き交う。空を見上げると、星が見えた。いつもは気づかなかつた夜の空だった。二四時間、明かりが消えることなく、ATMから現金を引き出せ、食料でも家電製品でも何でも自由に買い物ができる——。これが日常だと思っていた街は、実は非日常の世界だった。

◇ ◇

東日本大震災、熊本地震、西日本豪雨……。ここ数年、大きな自然災害に見舞われてきた。日本の防災体制は強化され、より充実してきたはずだった。だが、北海道全域の停電という想定外の事態が起き、電力供給の脆弱性を露呈した。

政治家と原発と停電

北海道電力の苦東厚真火力発電所の三機が同時に停止し、電力の需要と供給のバランスが崩れ、道内の電力はブラックアウトした。緊急時に融通されるはずの本州からの電力も止まった。北電は道内全域の停電リスクは低いと考え、対策を十分に取っていないかったようだ。電力供給事業者としてのその責任は大きい。

ブラックアウトは、東日本大震災後、泊原発が停止し、道内の電力の約五割を厚真火力発電所に頼っていたことも要因のようだ。今後、泊原発の存在がクローズアップされるだろう。自然災害に対する防災体制の強化は大切だ。しかし、東日本大震災で止まった原発が、今回の地震を契機に、再稼働の議論が高まることは本末転倒だろう。

◇ ◇

政治家の言動は被災者にどう映っただろうか。自らの電力政策の不十分さをさげおき、北電に指示して電力復旧に全力を挙げている姿を強調する閣僚たち。世耕弘成経済産業相は発生当日の朝、「数時間以内に復旧のめどをつける」と力んだが、道内のほぼ全域で電力が回復するまで二日もかかった。一方で、地震のツイッターで情報をいち早く発信。偽情報がネットで流れる中、信頼できる情報として重宝された面は

あるものの、公表される前の情報も少なく、混乱に拍車を欠けたケースもある。道内の関係者からは「まだ外部に出していない情報が発信されるたびに別のところから問い合わせがきて、どうなっているんだと言われた」「政治家はアピールしたいのだろうが、迷惑なこともある」といった声が漏れた。

心肺停止を死亡と取り違えて発表するなど、道と政府で死者数のずれも相次いだ。本来、死者数は都道府県が認定し、発表することになっており、政府が先んじた結果、誤った情報が流れた。自民党総裁選で対立候補の石破茂氏との論争を避けてきた安倍晋三首相にとつては、地震が追い風に感じたのかもしれない。安倍首相は地震から三日後、被災した厚真町を視察した。安否不明者の捜索作業が続き、ライフラインの復旧も十分でない中、政治家の訪問に公務員の力を割くことが適切なのだろうか。安倍首相は地震関係閣僚会議で、「被災状況を直接この目で確認し、被災者の生の声をうかがい、対策に生かしたい」と表明したが、手元にある原稿を読んでおり、自身の言葉で語っているようには見えなかった。被災者の心に、首相の言葉は届いたのだろうか。

△洋▽